



さまざまな道具を使い分ける若狭塗の作業場。包丁研ぎなどにも使われる大村砥などの天然砥石で研ぎ上げ、最終段階では木炭を使用する。箸は240、600、1000番台、2000番のペーパーで順次仕上げていく

Information
加福漆器店 福井県小浜市一番町1-9 TEL 0770-52-0921
<http://kabukusikki.sakura.ne.jp/> オンラインショップ <http://kabukusikkiten.shop-pro.jp>

店内には、箸をはじめ盆や花器はもちろん、マウスやスマホカバーなど現代的な商品も並ぶ。これには宗徳さんの特別な思いがある。「伝統工芸やメイド・イン・ジャパンへの注目が高まっている反面、『ブームは東京五輪まで』と囁かれており、実際に

伝統の枠にとらわれず 若い世代に魅力を伝えて

自身を「変わり者」と称する宗徳さんが父に入門したのは、22歳のとき。予想通り、厳しい修業が待っていた。「父親のいうことって、なかなか素直に聞けないものでしょ。僕も例外ではなかったし、とにかく最初の2年間は研ぎだけ。正直なところ、飽きてくるわけです。そこで、鯖江市の軒下工場の講座を受講していただきました」。講座では、越前塗の職人が教える技法の数々で、腕やランチョンマット、飾り棚などをつくった。どれも刺激的でおもしろかった。

多彩な知識を吸収しながら地道な作業に耐え、伝統工芸士に認定されたのは12年目のことだった。

少しづつ下火になってきたと感じます。さらに、若狭塗は決してメジャーな存在ではありません。きらびやか過ぎて仕舞い込まれてしまう工芸品ではなく、若い人が興味を持つような商品開発も必要なんです」

宗徳さんが入門したときには市内に4軒あった店は、3軒に減った。「工房に入ったときにはまだ若かったですし、伝統工芸や後継者について聞かれても、答えようがなかった。一人前になるのに必死でした。でも、職人を続けるうちに危機感が募ってきました」。弟子をとろうにも育成する余裕はなく、かといって若狭塗がいくらでも売れる時代ではない。だからこそ、生計を立てるのはもちろん、憧れられるような職人になるため、常に新たなチャレンジを考えている。

「研ぎなどの条件に当てはまらないと若狭塗を名乗れないのが、足かせにもなります。でも、ここは漆器店を名乗っているのです、柔軟にやっつけていきたいです」



Profile
加福宗徳 【かぶく・ひろよし】
 22歳で3代目の父・清太郎さん入門し、腕を磨き続ける44歳。「今のところ家業に興味を示さないふたりの息子にも振り向いてもらえないよう、ひたすら頑張りたい」と笑う

若狭塗の伝統技術を踏襲しつつ、 新たな可能性を探る



漆刷毛を使い、漆を塗り重ねては「室」(むろ)で乾燥させ、研ぎ、さらに塗って…の繰り返し。小さいころにかぶれた経験もある漆だが、今では仕事に不可欠なパートナーだ



職人の工房内には、次の工程を待つ箸やトレー、椀など多彩な商品が並ぶ。全工程は20に及ぶだけでなく、塗り～乾燥に時間がかかるため、製作に1年かかる例も珍しくない



若狭塗に使用される素材は、マツなどの針葉樹の葉、もみ殻、菜種、貝殻やその粉末などさまざま。清太郎さんは、みかんのネットを使って蛇の鱗のような模様をつくり出した。アイデアが形になるとは、このことだろうか



下地を仕上げたからマツの葉などで型を取り、凹凸で模様を付けてから色漆を塗り重ねる。さらに金銀の箔や貝殻を貼り、塗り研ぎを重ねる「卵殻金銀箔押法」を採用するのが若狭塗最大の特徴。一般的な塗りの方法に比べて工程は多く、複雑だ



箸のほか、重箱や宝石箱などのイメージが強い若狭塗。近年は新たな商品の開発も進んでいる。宗徳さんオリジナルのボールペンやマウスなどは、受注生産品。手がかかるだけでなく、使う漆の量が多ければ高価となるのが通例。漆器を選ぶ際には、職人と十分にコミュニケーションをとるのが一番だ

【巻頭特集】

伝統工芸士の店、加福漆器店

若狭塗の新たな可能性を求めて

江戸時代初期に確立されて以来、高級感漂う伝統工芸品として、揺るがぬ地位を築いてきた若狭塗。小浜市で4代続く加福漆器店は、独自の商品をつくり続ける。若狭塗は、今後どのような進化を遂げるのか？ 後継者の育成は進んでいるのだろうか？ 22年のキャリアを積みあげた伝統工芸士が、若狭塗の今と未来を語る。

思いもしなかった職人の道 12年の修業を乗り越えて

「父・加福清太郎が職人でしたから、若狭塗りは身近な存在。子どものころにも、何度か「研ぎ」をして遊んだことがあります」。そう話しながら、加福漆器店4代目の加福宗徳は天然砥石に水を含ませると、小箱の表面を研ぎ始めた。砥石が漆表面を削る音はさほど大きくはないが、砥石と削られた漆によって水が濁るところを見れば、漆が少しずつ削られていくのが分かる。

江戸時代初期に始まる若狭塗。小浜藩御用塗師の松浦三十郎が、中国の漆芸に倣って海底の模様を再現した。マツ葉もみ殻などを撒いて型をとる、あるいは金銀の箔や貝殻、卵の殻に漆を上塗りしてから研ぎ出すのが特徴だ。20以上に及ぶ工程のなかで、研ぎには最も高い技術が要求される。しかし、学生時代の宗徳さんは、高度な作業に挑む父の背中に、良いイメージがなかったという。

「中高生時代には『こんな地味な仕事で、21世紀まで残るはずがない』と。ましてや、自分が職人になるなんて、思いもよりませんでした」。高校卒業後には大手スーパーに就職し、婦人服の販売店への転職も経験。職人の道に進もうと決意したのは、勤め先が移転するタイミングだった。「次は何をしようかと考えたとき、思い出したのが若狭塗でした。図画工作や技術家庭は好きだったので、憧れの職業でもあった大工も考えました。でも、人と違うことがやりたくて」